

公益事業レポート 2020

遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞 授賞



シリーズ認知症 第3回 『認知症と高血圧』 ライブセミナー

一般財団法人
東京顕微鏡院



「すべての人びとのいのちと環境のために」



すべての人びとのいのちと環境のために

当財団は、2013（平成25）年4月1日に一般財団法人東京顕微鏡院に移行しました。これまで財団法人東京顕微鏡院（旧財団）が行ってきた諸事業を引き継ぐとともに公益目的支出計画に則って公益事業を実施し、これにより「健康な命」と、それを支える「生活環境衛生」の維持・向上・増進を目指し、もって社会福祉に貢献することを目的としています。

新制度下において、一般財団法人に移行した法人は、これまで法人内部に留保した財産（公益目的財産）を、自ら定めた公益目的支出計画に基づき、本来の目的である公益目的に毎年一定額を使用することが義務付けられています。

令和2年度を迎えて

2020（令和2）年度は、こころとからだの元氣プラザが創業の地である飯田橋から、神田神保町に移転したエポックメイキングな年となりました。

その一方、新型コロナウイルスの流行により、当財団およびこころとからだの元氣プラザは、厳しい運営状況を強いられる一年となりました。

新型コロナウイルスは、いまだ収束の見通しの

立たない状況ではありますが、職員一丸となり、状況の打開に向けあらゆる努力をしています。

公益目的事業費としては、44,937千円を支出する計画でとり進めました。

13年目を迎えた遠山椿吉賞

2020（令和2）年度の遠山椿吉賞は、食と環境の科学賞としては7回目となります。また、40歳以下（応募年の4月1日現在）の応募者を対象とした「遠山椿吉記念 山田和江賞」は、食と環境分野の第3回を顕彰する運びとなり、多くの若き研究者から選考されました。

本賞は、ディーゼル排気微粒子（DEP）の気管支喘息への悪影響を世界で初めて明らかにし、その主要因物質の報告を行うなど、動物および細胞レベルの公衆衛生分野における貢献が大きい研究に対し、顕彰を行いました。

また、山田和江賞は、浄水処理過程において、ウイルスの検出や除去技術の開発を行い、iPCRの検出技術を水処理過程に応用するなど、高感度検出法としても意義が高い研究であるとして、今後の発展に期待し、顕彰いたしました。

遠山椿吉賞は、選考委員の先生方の本賞の主旨

に対する真摯な思いと厳正なる審査により、公衆衛生と予防医療にまい進する研究者に光をあてる顕彰制度として、わが国に根付きつつあることを感じております。改めて当財団の創立者、遠山椿吉博士に心からの感謝を捧げたいと思います。

健やかなところとからだのために

2018（平成30）年度からは、長寿社会の大きな問題である認知症を取り上げたセミナーシリーズを3年計画で開催。時代の要請を捉え、先駆的視点から、セミナーの企画開催に努めております。今年度は、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、両法人では初となるライブ配信での開催となりました。

当財団豊海研究所にて、職員が講師を務める「夏休みこども研究者体験セミナー」も中止し、代替として「こども研究者体験ワークブック」を出版・配布しました。

困難な時代へのチャレンジ

新型コロナウイルスの流行で生活環境が大きく変化し、情勢は困難を極めています。人々の健康

への意識は高まり、両法人の社会における役割も今まで以上に重要性を増しています。当財団は、2021（令和3）年4月1日に130周年の節目を迎えましたが、改めて創業精神に立ち返り、将来につなげ、さらなる発展への契機としたいと思います。「健全な生活環境」を追求する東京顕微鏡院と、「健康なところ」「健康なからだ」を追求するところとからだの元氣プラザは、温かな眼差しを持って、人々に共感し寄り添う組織として、これからも事業に取り組んでまいります。

2021（令和3）年5月

一般財団法人東京顕微鏡院
医療法人社団ところとからだの元氣プラザ



理事長

山田 匡通

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創立者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。2015(平成27)年度から、若い研究者を支援する「山田和江賞」も、新たに加わりました。2020(令和2)年度は、新型コロナウイルス感染症流行のため、授賞式、記念講演およびレセプションは中止となりました。



遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞

2020(令和2)年度は、食品の安全、食品衛生、食品の機能、食品媒介の感染症・疾患、生活環境衛生を重点課題としました。「遠山椿吉賞」は日本の公衆衛生において、人びとの危険を除き、命を守るために、先駆的かつグローバルな視点を持ち、地道に社会への貢献を追求する研究者(個人または研究グループ)を顕彰する賞です。「山田和江賞」は、40歳以下(応募年の4月1日現在)の応募者に対し、その優秀な研究成果を顕彰するとともに、研究のさらなる発展を奨励する目的で、賞状、記念品および賞金100万円を贈呈し顕彰するものです。故山田和江名誉理事長・医師の、50余年にわたる貢献を記念して創設されました。

遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞



高野 裕久 (たかの ひろひさ) 氏

京都大学大学院 地球環境学堂
地球益学部長、環境健康科学論分野 教授

「大気汚染物質、環境化学物質によるアレルギー悪化メカニズムの解明と悪化影響スクリーニング法の開発」

副賞 300万円

遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞 山田和江賞



白崎 伸隆 (しらさきの ぶたか) 氏

北海道大学大学院 工学研究院
環境工学部門 准教授

「水中病原ウイルスの浄水処理性の詳細把握とウイルス処理に有効な浄水技術の新規開発」

副賞 100万円

選考の過程

2020(令和2)年3月から学会等208団体およびマスメディア70媒体に資料を送付し、日本全国の大学関連学部学科や主な研究機関等2,415ヶ所に応募案内を送り、6月末日には19件のご応募をいただきました。

選考プロセスは、一次審査・選考委員会という二つのステップで進めました。一次審査では、各選考委員に19件すべての応募論文に目を通していただき、五つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②研究・技術の独自性、③技術の普及の可能性、④社会へのインパクト、⑤推薦したいテーマと思うか)で五段階評価を付けていただきました。評価票の集計資料は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論は、両法人合同の経営会議にて選考委員長よりご報告いただき、お二方の授賞が決定しました。

- 3月「遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞」広報ホームページ掲載
- 4月 公募開始
- 19件 応募
- 6月末日 締め切り (7月～9月 選考プロセス)
- 9月 選考委員会 (遠山椿吉賞 選考本賞・山田和江賞 推薦)
- 10月 経営会議で決定
- 2月 授賞式・記念講演会 レセプション (中止)



創立者 遠山 椿吉 (とやま ちんきち)

1857(安政4)年、山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年、東京医科大学撰科に入学し、衛生学および細菌学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力。また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日逝去。享年71。

授賞にあたって



山田 匡通

一般財団法人東京顕微鏡院
医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長

この度「遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞」を受賞された高野裕久先生は、ディーゼル排気微粒子(DEP)の気管支喘息への悪影響を世界で初めて明らかにし、その主要因物質の報告を行うなど、動物および細胞レベルの公衆衛生分野で貢献されたことに対し、感謝とともに、受賞を心よりお慶び申し上げます。

「山田和江賞」は、浄水処理過程において、ウイルスの検出や除去技術の開発を行い、iPCRの検出技術を水処理過程に應用するなど、高感度検出法としても意義が高い研究をされた、白崎伸隆先生が受賞されました。今後ともそのご活躍に強く期待したいと思います。

遠山椿吉賞は、「公衆衛生向上をはかる創造性」「臨床現場での予防医療の実践」「これからの人の育成」を本質とした賞

と位置づけています。奨励賞の趣旨を持つ「山田和江賞」もあり、若い研究者の方々の積極的なご応募を通して、ますますわが国の公衆衛生、予防医療分野の発展につながれば幸いです。

また、選考委員の皆様の多大なるご尽力に、心から厚く御礼を申し上げます。

高野先生、白崎先生の、ますますのご活躍・ご健勝を心より祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。誠にありがとうございます。

受賞者あいさつ

遠山椿吉賞 高野 裕久氏

この度は、遠山椿吉記念 食と環境の科学賞を賜り、誠にありがとうございます。光栄の至りに存じます。

私は、内科医としての臨床経験を活かしつつ、環境医学研究を続けてまいりました。特に、臨床の現場より得た問題意識を基に環境医学研究を展開し、『環境要因が健康に及ぼす影響とその分子機構を明らかにし、得られた知見を健康影響の予防・軽減・治療に応用する』ことをめざしてまいりました。

今回、生活環境を広く汚染する環境化学物質や大気汚染物質のアレルギー悪化影響を指摘し、分子メカニズムを解明した点、多くの環境汚染物質や消費者製品の悪化影響をスクリーニング、評価できる方法、システムを開発、構築した点等を評価していただいたことを、大きな誇りに思います。

今後も、アレルギーの医学的、環境学的対策の提案を含め、国民、特に、将来を担う若者の健康に役立てるため、公衆衛生、予防医学的研究や実践に精進してまいりたいと存じます。本研究にご協力いただいた関連諸氏に深く感謝申し上げます。受賞の御礼の挨拶に代えさせていただきます。



遠山椿吉記念 山田和江賞 白崎 伸隆氏

この度は、大変栄誉ある山田和江賞を授与いただきまして誠にありがとうございます。ご選考いただきました先生方、ならびに東京顕微鏡院関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

水道における病原微生物対策として、細菌については、水道水質基準項目に一般細菌および大腸菌が規定されており、浄水処理効果の評価や水道水の水質管理が行われています。

また、原虫については、水道におけるクリプトスポリジウム対策指針により、水道水のリスク管理が行われています。その一方で、ウイルスについては、細菌や原虫に比べて、水道に関わる科学的知見が限定されているのが現状です。このような状況を踏まえ、ウイルスについての水道水の安全の根拠を科学的にしっかりと示すことができる枠組みを作るべく、ウイルスの検出・定量技術、浄水処理性評価手法、浄水処理技術に関する研究・開発を行ってまいりましたが、これらの成果を高く評価していただき、大変に嬉しく思っております。

今後も、本受賞を励みとして、実社会への適用に資する研究・開発を実施していけるよう、努力と挑戦を続けていく所存です。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



◆選考委員長講評



渡邊 治雄 氏

国立感染症研究所 名誉所員（前所長）、
元国際医療福祉大学大学院 教授

選考委員会では、公平性を保つため、選考委員が応募者と利害関係者に当たる場合には評価から外れております。また、①公衆衛生への貢献度、②研究・技術の独自性、③技術の普及およびその可能性、④社会へのインパクトという四つの選考基準を主軸に厳正に評価を行っております。

本年度の遠山椿吉賞には、京都大学大学院地球環境学堂地球益学廊長、環境健康科学論分野教授、高野裕久先生（「大気汚染物質、環境化学物質によるアレルギー悪化メカニズムの解明と悪化影響スクリーニング法の開発」）に決まりました。

高野先生は、アレルギー疾患に対するディーゼル排気粒子（DEP）等の環境因子の影響を、動物および細胞レベルで調べた独自性・新規性の高い研究成果を上げられました。特に大気汚染物質であるディーゼル排気微粒子（DEP）が気管支喘息を悪化させることを世界で初めて明らかにし、DEP中の有機化学物質（群）のキノン類が悪化の主要因であることを報告しました。

選考委員会としては、今後公衆衛生学的な研究をさらに促進していただき、ヒトの健康増進に貢献していただくことを期待しております。

続いて山田和江賞は、北海道大学大学院工学研究院環境工学部門准教授、白崎伸隆先生（「水中病原ウイルスの浄水処理性の詳細把握とウイルス処理に有効な浄水技術の新規開発」）に贈呈されることになりました。

白崎先生は、浄水処理過程においてノロウイルス等のウイルス検出にiPCR法を用いた技術の開発を行うとともに、その除去技術の開発を行い実際の現場における応用を目指されております。37歳という若手の研究者ですが、すでに英文論文を54編発表しており、将来性が高い研究者であると評価されました。まさに山田和江賞に相応しい研究者であります。

高野先生、白崎先生の研究が今後さらなる発展を遂げますことを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。おめでとうございます。

◆来賓祝辞



大塚 柳太郎 氏

一般財団法人自然環境研究センター 理事長
元国立環境研究所 理事長
東京大学名誉教授

環境中のアレルゲンおよび病原ウイルスによる健康影響は、人々のライフスタイルが変化し、大気・水・化学製品など身近な環境因子も変化する中で急増し重篤化する傾向にあり、重大な医学・公衆衛生学的脅威になっています。

これらの健康影響を予防・軽減・根絶するには、医学・生命科学・公衆衛生学と環境科学に基づくアプローチを総合することが必要で、大規模な組織的取組が有効になる一方、広範な分野に造詣が深く旺盛な探求心をもつ研究者の独創的な取組も不可欠といえます。

高野裕久氏は内科医の臨床経験をもつ研究者で、2010年まで10余年にわたり勤務した国立環境研究所では、環境健康研究領域の領域長として、その後は京都大学教授としてCREST（科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業）のプロジェクト代表

者を務めるなど、環境学と医学を統合する研究のパイオニアとして活躍しています。

高野氏の中心テーマは「大気中微粒子」「アレルギー」「免疫」であり、環境測定・臨床観察による健康影響の実態把握、分子機構に基づく原因究明、予防・軽減のための手法開発等で画期的な成果を上げてきました。同氏の研究対象は、ディーゼル排気微粒子、ダニアレルゲン、食品・包装容器・難燃剤・樹脂材料等に含まれる広範な化学物質に及び、広く国民の健康の維持増進と安全・安心に寄与しています。

山田和江賞の受賞者の白崎伸隆氏は、培養が困難な水系感染症の処理性をテーマとし、ノロウイルスについてはウイルス様粒子の作製とともに、粒子の定量を可能にする免疫PCR法の開発に世界に先駆けて成功しました。さらに、浄水処理過程における病原ウイルスの不活性化に取り組むなど、水道水の安全性の向上を通し国民の健康と安全・安心に貢献しています。

本年度の『遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞』を受賞された両氏のさらなる活躍を祈念し、祝辞といたします。

*第7回「食と環境の科学賞」受賞者およびその研究についての詳細は、当財団ホームページをご覧ください。

普及啓発 (健康セミナー)

働き盛りからの予防医療の普及啓発

1994(平成6)年より「働く人の健康増進セミナー」を7回開催、「働く人の健康教育講座」を15回開催するほかシンポジウムも多数開催してきました。

2008(平成20)年から『健康日本21』*に基づく健康セミナーシリーズを展開し、本年度23回目を開催。平成30年度より寺本民生先生を座長とした、認知症を考えるセミナーシリーズを3年計画で開催しました。

*21世紀における国民健康づくり運動

健康に関するセミナー

超高齢化にともなって認知症となる人は今後も増加を続けると予測され、厚生労働省のデータによると、2025年には700万人を超えるとの推計値が発表されており、その対策はわが国の公衆衛生上重要な課題です。シリーズ「認知症―超高齢社会を見据えて、今から始める予防策」の第3回は、認知症予防対策の一環として、認知症と高血圧の関連性について取り上げました。



◆シリーズ「認知症―超高齢社会を見据えて、今から始める予防策」第3回 「認知症と高血圧」

学校、企業・自治体等の健康管理担当者、管理栄養士等の皆さまに役立つ実践セミナー

日時:2020(令和2)年11月10日(火)14:00~16:05
※YouTubeによるライブ配信後、オンデマンド配信
後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、
日本医師会、東京都医師会
座長:寺本民生先生(帝京大学臨床研究センターセンター長、
(医社)こころとからだの元氣プラザ理事)

■主催者挨拶:中村 哲也

((医社)こころとからだの元氣プラザ
統括所長)



「認知症予防のための高血圧対策、コロナ禍における認知症予防への取組について先生方にお話を賜ります。本日のセミナーが皆様の健康に寄与することを願っております。」

■プロローグ「認知症に対峙する ―そのために―」

寺本 民生先生(帝京大学臨床研究センターセンター長
(医社)こころとからだの元氣プラザ理事)



高血圧と認知症のリスクについてのデータを示し、血圧を正常値に管理することは、脳卒中を抑制し、さらに認知症予防の効果もあると述べられました。

■講演「高血圧の治療は 認知症を予防する」

遠藤 英俊先生(聖路加国際大学臨床教授、名城大学特任教授、
NPO法人シルバー総合研究所理事長、
元国立長寿医療研究センター長寿医療研修センター長)



特に40歳代からの血圧管理が大切であり、認知症予防には有酸素運動や知的活動、有用な食品の摂取、老後も引退せず社会的交流を保つことも有益であると指摘されました。

■講演「Withコロナ時代の 認知症の予防と共生」

朝田 隆先生(東京医科歯科大学医学部附属病院客員教授、
筑波大学名誉教授、(医社)創知会理事長)



コロナ禍での認知症予防には、従来の集合型に加え、個別活動(インターネットやTV)など多様な社会交流が特に必要であることを、オンライントレーニングの動画も交えてお話いただきました。

■パネルディスカッション

座 長: 寺本 民生先生
パネリスト: 遠藤 英俊先生、朝田 隆先生
(ご登壇順)



事前に募集した質問にお答えいただく形で議論が進み、運動の継続には習慣化のための工夫が重要など、多くの意見が交わされました。

■ライブ配信のための取組



両法人のセミナーとしては初となる、ライブ配信による開催でした。撮影、音声、インターネット回線管理など、スタッフ全員が協力して運営に当たりました。

普及啓発

(食と環境のセミナー)

身近な食や環境の問題について

当法人では、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーを1976(昭和51)年より40年以上にわたって開催し、最先端の食や環境の情報提供に努めてきましたが、昨年度に続き本年度も、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。食の安全に関する学会の支援や、WHOのアクションプランに呼応した薬剤耐性調査は継続して行っています。

■食と環境のセミナー

本セミナーは企画・開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえ、中止となりました。

■2019年に食品従事者から検出されたサルモネラ属菌の血清型と薬剤耐性

1980年代頃から抗菌薬の効かない薬剤耐性菌が増加し、感染症の治療に大きな問題が生じています。このため2015年にWHOは薬剤対策のアクションプランを提言し、世界に向けて調査や制御対策を要請しました。

当法人の臨床微生物検査部では、2017年から食品従事者の健康管理として、腸内細菌検査から検出されたサルモネラ属菌の血清型ごとの薬剤耐性頻度の検討を行ってきました。今回の調査では、2019年に分離されたサルモネラ属菌200菌株を対象とし、2018年に実施した成績と比較検討を行いました。

1. サルモネラ属菌の血清型別

供試した200菌株は48の血清型に型別されました。主な血清型は表に示すように25菌株(12.5%)が血清型Schwarzengrundに型別され、ついでThompson 14菌株(7.0%)、Altonaが13菌株(6.5%)、InfantisおよびManhattanが12菌株(6.0%)と続きました。昨年度の調査に引き続きSchwarzengrundが最も多い血清型となりました。

2. サルモネラ属菌の薬剤耐性

供試した200菌株のうち81菌株(40.5%)が1剤から10剤の薬剤の耐性株でした。最も高頻度に型別されたSchwarzengrundは、供試菌株がすべて耐性株であり、3薬剤以上の多剤耐性株も20株(80.0%)ありました。またInfantis、Manhattan およびO4,H:i,-についても3薬剤以上の多剤耐性株が25.0%以上認められました。耐性株の出現状況は昨年度とほぼ同等の結果でした。

まとめ

2019年に分離されたサルモネラ属菌の血清型は、円グラフに示すように2018年に分離された血清型とほぼ同様でした。また、分離菌株の耐性率は63.2%から40.5%へと減少し、3薬剤以上の多剤耐性率においても24.6%から19.5%とやや減少しました。耐性率の高いSchwarzengrundが占める割合が22.8%から12.5%と減少したことが耐性率減少の原因の一つと考えられます。今後ともサルモネラの血清型と薬剤耐性の動向を継続的に調査し、薬剤耐性モニタリング事業として社会に貢献する資料を提供していきたいと思えます。

学会等支援

日本食品微生物学会への支援

当法人は、1989(平成元)年4月より30年にわたり学会事務局として学会活動を支援しています。同学会は食品の微生物に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全および機能の向上に寄与することを目的とした学会です。企業・行政・研究機関のいわゆる産官学で構成されています。



日本カンピロバクター研究会への支援

当法人は、2011(平成23)年度から研究会事務局として、細菌性下痢症の最も主要な病原菌である本菌の研究者や食中毒・感染症防止に取り組む方々の学際的な研究を支援しています。



NPO法人食の安全を確保するための微生物検査協議会への支援

同協議会は2003(平成15)年発足後、2011(平成23)年度にNPO法人化し、食品の安全確保の課題に取り組んでいます。

ATP・迅速検査研究会への支援

同研究会は食品衛生における迅速検査技術向上を目的として1999(平成11)年に発足し、20年にわたり活動しています。

円グラフ. 2018年と2019年に分離されたサルモネラ属菌の血清型別の比較

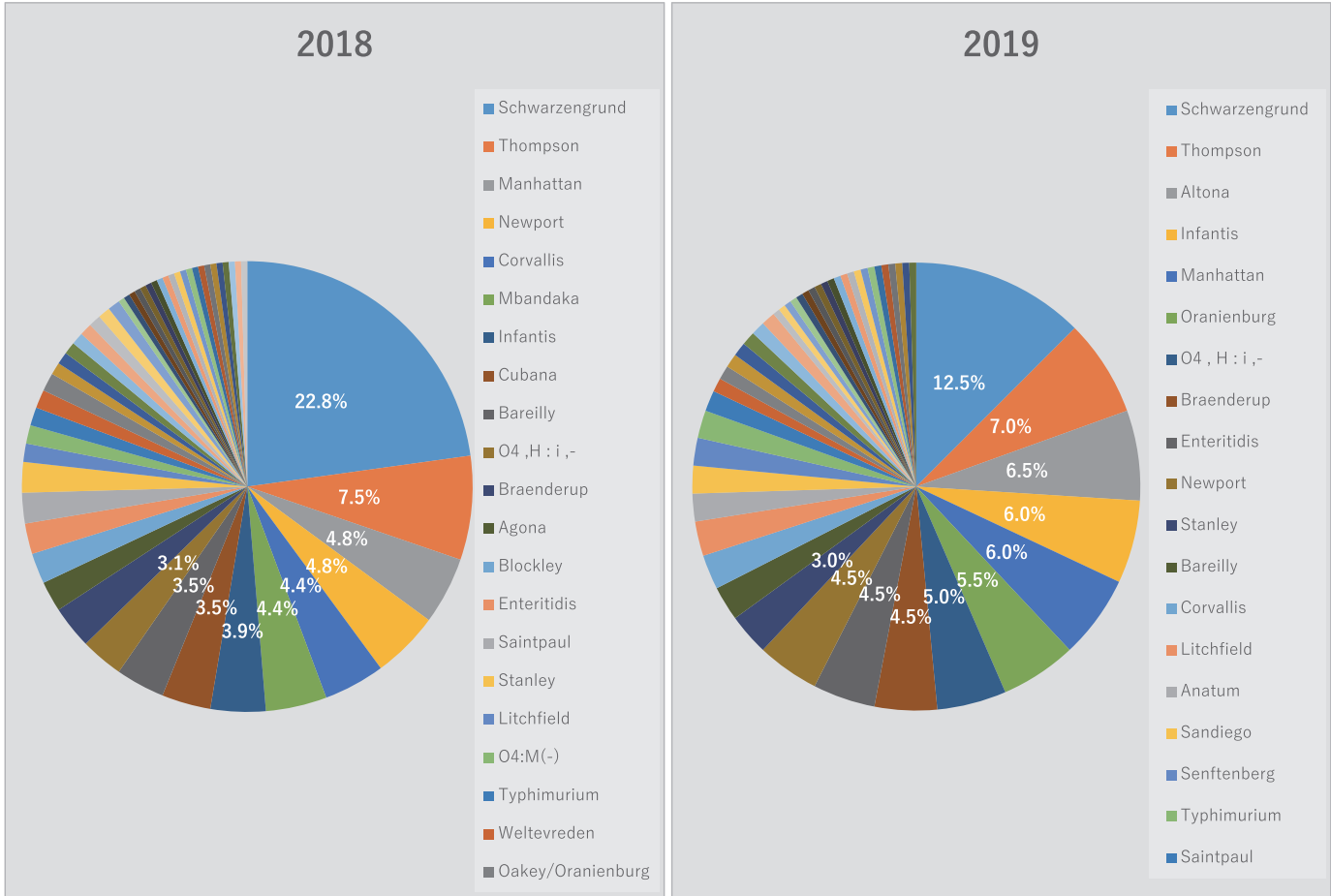


表. 2019年に分離されたサルモネラ属菌の血清型別および薬剤耐性結果

	血清型名	菌株数	1剤以上耐性合計		1剤のみ耐性		2剤のみ耐性		3剤以上耐性	
			菌株数	(%)	菌株数	(%)	菌株数	(%)	菌株数	(%)
1	Schwarzengrund	25	25	100.0%	1	4.0%	4	16.0%	20	80.0%
2	Thompson	14	3	21.4%	3	21.4%	-	-	-	-
3	Altona	13	1	7.7%	1	7.7%	-	-	-	-
4	Infantis	12	5	41.7%	1	8.3%	1	8.3%	3	25.0%
4	Manhattan	12	10	83.3%	2	16.7%	4	33.3%	4	33.3%
6	Oranienburg	11	1	9.1%	1	9.1%	-	-	-	-
7	O4 , H : i , -	10	5	50.0%	1	10.0%	1	10.0%	3	30.0%
8	Braenderup	9	-	-	-	-	-	-	-	-
8	Enteritidis	9	8	88.9%	6	66.7%	1	11.1%	1	11.1%
8	Newport	9	-	-	-	-	-	-	-	-
11	Stanley	6	-	-	-	-	-	-	-	-
12	Bareilly	5	-	-	-	-	-	-	-	-
12	Corvallis	5	1	20.0%	1	20.0%	-	-	-	-
12	Litchfield	5	1	20.0%	1	20.0%	-	-	-	-
15	Anatum	4	1	25.0%	1	25.0%	-	-	-	-
15	Sandiego	4	1	25.0%	1	25.0%	-	-	-	-
15	Senftenberg	4	-	-	-	-	-	-	-	-
15	Typhimurium	4	1	25.0%	-	-	1	25.0%	-	-
19	Saintpaul	3	1	33.3%	1	33.3%	-	-	-	-
	その他の血清型 (29型)	36	17	47.2%	7	19.4%	2	5.6%	8*	22.2%
	合計	200	81	40.5%	28	14.0%	14	7.0%	39	19.5%

対象薬剤：アンピシリン、セファゾリン、セフォタキシム、ストレプトマイシン、ゲンタマイシン、カナマイシン、テトラサイクリン、クロラムフェニコール、コリスチン、ナリジクス酸、シプロフロキサシン、スルファメトキサゾール+トリメトプリム合剤

※血清型：Kentucky、O4 , M(-)：2株 Agona、Brancaster、Muenster、Minnesota：1株

地域貢献 (次世代の育成)

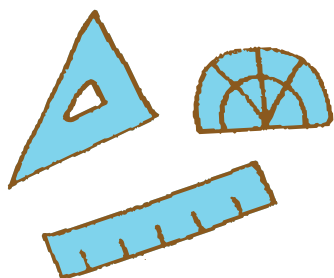
次世代を担うこどもたちへ

2006 (平成18) 年よりスタートし、15年目となる夏休み「こども研究者体験」セミナーは、新型コロナウイルス感染症流行のため、中止となりました。その代替としてワークブックを企画・作成し、配布を行いました。サイエンスを学ぶ楽しさ、食品の安全性や健康に関心を持つきっかけとして、次世代を対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

こども研究者体験ワークブック

新型コロナウイルス感染症流行のため、中止となったセミナーの代替として作成された本ワークブックは、小学5・6年生が、ご家庭の人と一緒にできそうな、やさしい理科実験を紹介しています。材料は各家庭にあるものや、近所のスーパーでも手に入りやすいものを使用し、写真やイラストを多用しながら、明るく見やすい誌面構成にしました。

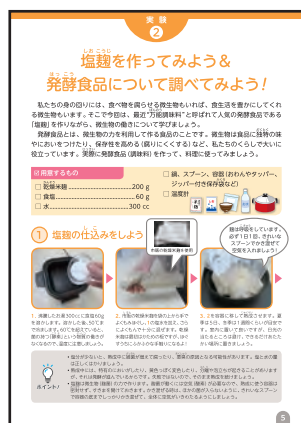
実際のセミナーと同様、実験を通してサイエンスの面白さを知っていただくことを目的としています。



発行日：2021 (令和3) 年3月
サイズ：A4判
ページ：16ページ
発行部数：3,000部
監修：伊藤 武 (当財団名誉所長)
安田 和男 (当財団理事)
配布先：東京都中央区立小学校16校、
山形県山辺町立山辺小学校



実験①



実験②



実験③



実験④

実験①「ポテト培地を作って、身近なカビを観察してみよう！」

じゃがいもで培地を作り、ドアノブやお風呂場などで採取したカビを培養して観察・記録します。

実験②「塩麹を作ってみよう&発酵食品について調べてみよう！」

塩麹を作り、肉や魚などを漬け込み、焼いて食べてみます。身の回りにどんな発酵食品があるかも調べます。

実験③「ホットケーキミックスを使わずにホットケーキを作ってみよう！」

ベーキングパウダーを使わずに、ホットケーキを作ります。酸性剤の有無で食べ比べもします。

実験④「野菜や果物から色素を取り出してみよう！」

身近な野菜や果物から色素を抽出し、取り出した色素の性質を調べます。



出版関連

健康情報の普及および啓発、活動の情報開示

予防医療の普及啓発のため、講演内容を2008（平成20）年度から継続して小冊子で発刊しています。本年度は健康セミナーの講演録を小冊子として発行しました。遠山椿吉賞記念講演録、公益事業レポートは、当財団ホームページでもご覧いただけます。

『超高齢社会を見据えて、今から始める予防策 認知症と高血圧』

2018（平成30）年度より、新たに「認知症－超高齢社会を見据えて、今から始める予防策」というテーマで、3回シリーズのセミナーを企画・開催しました。本書は2020（令和2）年11月に開催された第3回「認知症と高血圧」の講演録です。

※セミナーの様様についてはP4をご参照ください。



新刊 発行日：2021（令和3）年3月
サイズ：A5判
ページ：60ページ
発行部数：1,000部 頒価：300円

遠山椿吉賞受賞記念講演 講演録

両法人の「事業年報」を発刊し、公益事業として遠山椿吉賞受賞記念講演の講演録を掲載しました。



新刊 発行日：2020（令和2）年9月30日
サイズなど：A4判（講演録：21ページ）
CD-ROM付属
発行部数：1,000部
配布先：契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など

シリーズ『超高齢社会を見据えて、今から始める予防策』 vol.1～vol.2（既刊）



vol.1 認知症と口腔衛生

発行日：2019（平成31）年3月
サイズ：A5判
ページ：56ページ
発行部数：1,000部 頒価：300円

2018（平成30）年11月に開催された第1回「認知症と口腔衛生」の講演録



vol.2 認知症と糖尿病・メタボ

発行日：2020（令和2）年3月
サイズ：A5判
ページ：56ページ
発行部数：1,000部 頒価：300円

2019（令和元）年10月に開催された第2回「認知症と糖尿病・メタボ～人生100年時代、あなたは大丈夫？～」の講演録

※シリーズ全冊、ホームページにてご購入いただけます。

遠山椿吉記念 第6回 健康予防医療賞

「本邦における子宮頸がん動向調査とHPVワクチン接種の効果の解析」

◎受賞者 上田 豊氏（大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学 講師）

遠山椿吉記念 第6回 健康予防医療賞 山田和江賞

「保育園・幼稚園に通っていない子どもの社会・経済・健康面の特徴」

◎受賞者 可知 悠子氏（北里大学医学部公衆衛生学 講師）

※当財団ホームページでも公開しています。

公益事業レポート2019

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。皆様に幅広くお配りし、公益事業の情報開示を行っています。



新刊 発行日：2020（令和2）年6月
サイズなど：A4判、16ページ
発行部数：2,000部

※当財団ホームページでも公開しています。

東京顕微鏡院創立者 遠山椿吉と感染症への取組

一般財団法人 東京顕微鏡院 食と環境の科学センター名誉所長 伊藤 武



遠山椿吉 博士

明治期の伝染病対策とは

明治初期から中期までは、世界に蔓延し猖獗を極めていた伝染病の病原細菌が相次いで発見され、微生物と疾患の関係が明確となってきた画期的な時代です。

それまでの伝染病に対する考えは、神罰や悪霊あるいは不潔な空気や水が病気を蔓延させるものであると信じられていました。従って、伝染病の治療や予防は魔除け、祈祷あるいは室内の薫蒸など非科学的な方法が行われていました。

明治時代になり、コレラ、赤痢、ジフテリア、結核などの伝染病は特定の病原菌が起すことが明らかとなり、病原細菌に焦点を当てた科学的な予防対策がとられるようになりました。

伝染病予防法の制定

国内においても明治13年に布告された伝染病予防規則を廃止し、明治30年に伝染病の蔓延を防止する目的で伝染病予防法が制定されました。対象とされた伝染病はこの時代に流行を繰り返す、死亡率の高かったコレラ、赤痢（疫痢を含む）、腸チフス、パラチフス、痘瘡、発疹チフス、猩紅熱、ジフテリア、流行性脳脊髓膜炎、ペスト、日本脳炎の11疾患を法定伝染病とし、医師からの届出と消毒などを法律に基づいて規定しました。

当時の法定対策

この法律に基づく防疫対策の重点は、病原菌を保有する患者の隔離と患者の家庭などの消毒、伝搬の危険性がある業務への就業禁止、集会の禁止、交通の遮断、鼠属・昆虫の駆除、あるいは船舶、汽車、電車の検疫などでした。清潔と消毒を施すことにより、伝染病の蔓延防止となることに力点が置かれ、清潔方法や消毒方法は命令により定められました。

また、この伝染病予防による患者対策は、患者を伝染病院に入院・治療を施して完治すれば退院できるとしていました。

遠山博士の異議

しかし、遠山博士は病気が完治しても病原菌を体内に保有している危険性を指摘し、そのような患者を退院させることは病原菌を市中にまき散らし、伝染病の予防対策にならないことを明治29年と33年に訴えました。伝染病予防法改正の必要を認めた明治医会*は委員に遠山博士を起用し、明治37年伝染病予防法改正案を起草しました。帝国連合医会も同様に遠山博士を委員に起用したため、2医会の改正案はほとんど同案でした。

ところが、翌年3月改正発布された予防法においてもなお、保菌者対策の点が改善されていないために、同年8月明治医会総代として遠山博士ほか7名は、内務大臣に法文解釈を質しましたが、却下されてしまいました。そこで、明治41年11月発行の『顕微鏡』**に、東京市の腸チフス患者数と治療後保菌者の割合を科学的根拠として添えた意見書を掲載しました。

「伝染病菌携帯者とその予防法」として掲載された論説の要点

1. 病原菌の検査が確立したコレラ、チフス、ジフテリアについては病原菌陰性の証明によって患者の拘束を解除することを法律に記載すること。
2. 治療とは「病原菌の排泄のないこと」とすること。
3. コレラとジフテリア患者には2次感染者が多いことから、これらの患者との接触者についても検査を実施すること。
4. コレラとジフテリア接触者については5日間の観察は適切ではないから改めること。
5. チフス患者治療後の検査では43%がチフス菌陽性である成績から、より適切な防疫対策を施すこと。

年	患者	死亡	治療	治療後保菌者%
明治三十八年	一、〇八八	三〇八	六二〇	三一、〇〇
同三十九年	一、四九八	四二七	一〇七一	五三、五五
同四十年	一、二八一	三五五	九二六	四六、三〇
平均		八七、二二三		四三、六一

東京の腸チフス患者***

感染源対策の重要性に着目

この当時は、抗生物質などによる治療法は開発されていなかったため、患者の免疫力や対症療法により、患者の救済を行っていました。

その後、この意見に基づいた予防対策が施行されましたが、すべての法定伝染病の検査が確立していないことから、予防対策の推進は極めて困難を伴ったと推察されます。昭和30年頃になり、伝染病患者の治療に、抗生物質や抗菌物質が広く使用されるようになり、短期間に病原体を撲滅できるようになりました。

遠山博士は、伝染病予防には感染源対策が重要であること、そのためには科学的データとして細菌学的検査が重要であることを指摘し、伝染病予防に多大なる貢献をしました。

創業精神は、予防医療への貢献

両法人の予防医療への貢献は、明治時代から根底に流れている倫理観であり、我々はこの理念を今後も継承していかなければなりません。

*明治医会とは、東大卒の医師の集まり【当時】。

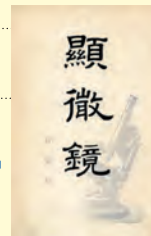
**『顕微鏡』：東京顕微鏡学会発行。会員は北海道から九州まで全国（韓国・台湾含む）医師559名【当時】。

***『顕微鏡』86号（明治41年発行）

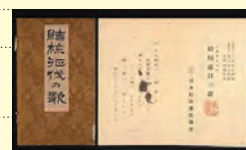
東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業

～三つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦前】	普及啓発活動、出版、その他公益活動など
	1800年～	
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立		『結核菌簡便検査法』出版
検査業務開始	1891(明治24)年	「顕微鏡」第1号(1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行
病原的細菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売		
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講	1892(明治25)年	
名称を東京顕微鏡院と改称		
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1894(明治27)年	機関誌「顕微鏡」第1号発行 啓蒙用幻灯映画製作 「顕微鏡の祖」マルピギー200年記念式典、本院にて挙行
飲料水の検査を開始	1895(明治28)年	コレラ講習会を開催
母乳検査を開始	1896(明治29)年	回帰熱講習会を開催
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1899(明治32)年	ペスト講習会を開催
	1900年～	
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる		上水協議会(日本水道協会の前身)(1904(明治37)年)遠山椿吉の呼びかけで設立
ペスト試験室を新設	1903(明治36)年	来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝國ホテル) 前列左からロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士、後列左から2人目が遠山椿吉
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される		
保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始		
遠山椿吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる	1907(明治40)年	
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を囑託(翌年帰国)		
遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	1908(明治41)年	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士を招待し、生花の会を開催
	1914(大正3)年	「結核予防善悪鑑」発行、「結核征伐の歌」を發表
(院長、長年来の研究による)脚気治療薬「うりひん」を製品化	1915(大正4)年	
創立30周年記念祝賀会	1922(大正11)年	「遠山博士脚気病原因之研究」発行
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失		
9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を再開	1923(大正12)年	
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1927(昭和2)年	「人生の意義と道德の淵源」出版。天皇に献上
遠山椿吉、肺がんのため遠逝、享年71	1928(昭和3)年	
	1929(昭和4)年	脚気の無料診療を開始
レントゲン深部治療開始	1930(昭和5)年	第1回脚気無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
創立50周年記念式典(1940年)	1935(昭和10)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
戦災により、以後10年にわたり事業中断	1945(昭和20)年	
	【戦後】	
遠山正路院長より事業を継承	1954(昭和29)年	
診療所を開設、細菌検査所を再開	1955(昭和30)年	



東京顕微鏡院講習科第1回卒業式(1892年)



うりひん広告



震災後に復興した東京顕微鏡院本院(1925年竣工)同年、病理組織検査開始、レントゲン科新設

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長) 遠山 椿吉	1891~1928年	第4代(院長) 高橋 悌三	1957~1967年	第7代(理事長) 下村 満子	1995~2007年
第2代(院長) 遠山 正路	1929~1954年	第5代(理事長) 山田 匡蔵	1967~1989年	現理事長	山田 匡通 2007年~
第3代(院長) 細谷 省吾	1955~1957年	第6代(理事長) 山田 和江	1989~1995年		

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動など	
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始			
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による 集団検査を拡大	1967(昭和42)年		
東京都の委託を受け、小中学生の 大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1972(昭和47)年		
建替えによる新院舎完成。	1974(昭和49)年		
人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録			
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、 食品衛生検査所を開設	1975(昭和50)年		
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1976(昭和51)年		
	1978(昭和53)年	離島村民の健康管理を目的とした 「小笠原健康な村づくり事業」を開始 「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける (簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年		
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催	
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(~2000年)	
	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催	
	1992(平成4)年	シンポジウム「ベイブリッジフォーラム '92-21世紀への対がん戦略」を開催 平成4年度より事業年報の発行開始	
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1996(平成8)年		
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」 「職場と住宅環境を考える」などを開催	
会員制人間ドックを開始	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催	
	2000年~		
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を 移転し、拡大		創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催	
トータルヘルスセンターBe-Well、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2001(平成13)年		
	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」 を開催	
医療部門を統合・拡充し、 医療法人社団こころとからだの元氣プラザを 設立	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念 シンポジウム「アダムとイブの医療革命」を開催	
水道法改正により、厚生労働大臣指定検査機関から、登録検 査機関への変更の認可を受ける	2004(平成16)年		
食品衛生法改正により、厚生労働大臣指定検査機関から、登 録検査機関への変更の認可を受ける	2005(平成17)年	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 -なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
立川研究所を一ヶ所に統合拡大		遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)と 市ヶ谷本院の施設再配置	2008(平成20)年		
こころとからだの元氣プラザ(飯田橋) 外来診療と女性のための生涯医療センターViViを統合		「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与	
	2009(平成21)年	遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム 「東京の水の源流を探る ~豊かな東京の水利用を支える 日本の水、世界の水~」を開催	



旧院の様子(1970年)



「小笠原健康な村づくり事業」(1978年~)



簡易専用水道検査
(1979年~)



ベイブリッジフォーラム'92
-21世紀への対がん戦略

こころとからだの元氣プラザ
(2003年~)



東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動など
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託 臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行 三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、同「特別賞」を中村雅一氏に授与
3月11日 東日本大震災により、創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止 4月1日 創立120周年 立川研究所に「動物を用いる検査施設」開設	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、同「特別賞」を小泉昭夫氏に授与 創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略—研究・治療・ケアの最前線から」を開催
創立120周年記念年頭式 豊海センタービル竣工 日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転 4月1日に財団法人東京顕微鏡院は一般財団法人に移行、「一般財団法人 東京顕微鏡院」と名称変更 [ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(放射能試験) 登録衛生検査所「元氣プラザ細胞病理コアテクノロジー」がスタート	2012(平成24)年	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、同「特別記念賞」を久山町研究グループ代表 清原裕氏に授与
元氣プラザビル3～5階の人間ドック・健診フロアを男女別フロアに改装 [ISO/IEC 17025:2005]を認定取得(食品試験：理化学、微生物) 「元氣プラザ臨床検査センター」機能を元氣プラザビル内に移設拡充し、院内施設化。これに伴い、衛生検査所登録を抹消	2013(平成25)年	「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を小西良子氏、同「功労賞」を石川哲氏に授与 「創立120周年記念誌」を刊行
	2014(平成26)年	「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」を岡山明氏、同「特別賞」を伊藤千賀子氏、同「奨励賞」を西浦博氏に授与
	2015(平成27)年	「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」を新田裕史氏、同「奨励賞」を山口進康氏に授与
	2016(平成28)年	故山田和江名誉理事長・医師の50余年の功績を記念して、遠山椿吉賞50歳未満の応募者を顕彰する「山田和江賞」を創設 「遠山椿吉記念 第4回 健康予防医療賞」を野田光彦氏、同「山田和江賞」を石和田稔彦氏に授与
	2017(平成29)年	「遠山椿吉記念 第5回 食と環境の科学賞」を加藤昌志氏、同「山田和江賞」を原田浩二氏に授与 DVD教材「これで納得! HACCPシステム導入のための7原則」を刊行
	2018(平成30)年	「遠山椿吉記念 第5回 健康予防医療賞」を辻一郎氏、同「山田和江賞」を富岡公子氏に授与 eラーニング「はじめての食品表示」を実施
	2019(平成31/令和元年)	「遠山椿吉記念 第6回 食と環境の科学賞」を鈴木聡氏、同「山田和江賞」を杉山圭一氏に授与
[ISO/IEC 27001:2013]を認定取得 (ISMS) 「動物を用いる検査施設」を豊海研究所に移設 「診療所こころとからだの元氣プラザ」神保町に移転 こころとからだの元氣プラザ「健康経営優良法人2021」認定を取得 4月1日 東京顕微鏡院創立130周年	2020(令和2)年	「遠山椿吉記念 第6回 健康予防医療賞」を上田豊氏、同「山田和江賞」を可知悠子氏に授与
	2021(令和3)年	「遠山椿吉記念 第7回 食と環境の科学賞」を高野裕久氏、同「山田和江賞」を白崎伸隆氏に授与

歴史写真ギャラリー

～東京顕微鏡院 創業時の姿～



明治29(1896)年、神田小川町の院舎



明治29(1896)年、院内実験室



明治29(1896)年、院内講堂



明治44(1911)年、創立20周年記念式典

Our Credo 私たちの公益事業

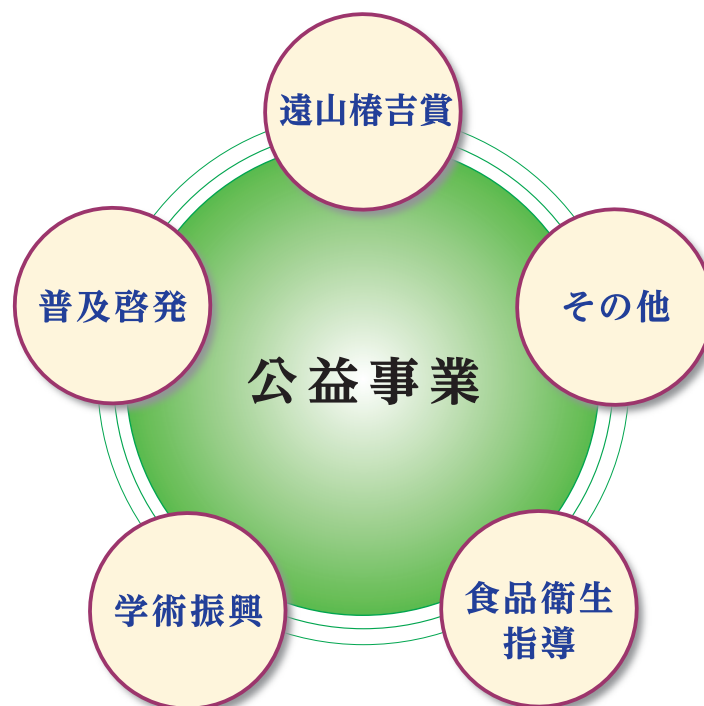
1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識をもてる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

<顕彰制度>

- *遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞 顕彰
(告知、応募論文募集、選考委員会開催、授賞式・記念講演・レセプション開催、講演録作成)
- *遠山椿吉記念 第8回 食と環境の科学賞(令和4年度)準備

<セミナー>

- *健康セミナー
- *食と環境のセミナー



<次世代育成>

- *夏休み「こども研究者体験」セミナー

<その他>

- *公益事業レポート
- *公益事業紹介映像制作

2021(令和3)年度 公益事業計画

発行:

一般財団法人 東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <https://www.kenko-kenbi.or.jp>

医療法人社団 ころとからだの元氣プラザ 広報室

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング TEL.03-5210-6897 <https://www.genkiplaza.or.jp>